

## 新 入 生 三 題

最初の話は、薬剤師として働いている薬局でのこと。弘学館の中学生が薬を取りに来た。制服は体のサイズに比して大きい、年齢を見ると12歳。今年入学し、初めて親元を離れて生活をしている新入生。薬を渡して、しばらくすると、別の子どもとまた来た。その子は、私服を着ていたが、住所を聞くと同じ学校。年齢を見ると、この子も一年生。一緒に来たので「お友達？」と最初の子に聞くと、答えるより、連れてきた隣に座っている子どもの顔をうかがう。その子に「二人はお友達？」と聞くと「うん」とすぐ答えが返ってきた。「友達だってよ。良かったね」と最初の子どもに言うと、本当に嬉しそうな笑顔になって仲良く帰っていった。

二題目。本庄にある佐賀銀行のATMで順番を待っている時のこと。三人の男子学生が話している。「お金を入れようとしたら『振り込め詐欺に注意！！』と画面に出たので、びっくりして止めた。電気代の支払い間に合うかなあ」別のひとりが「なんとなく余計なお金を下ろしてしまった。1万円下ろしたら千円札ばかり出てきた。お前は1万円札だったよな」。新入生だなお思いながら、しばらく聞いていたが、お節介お婆さんは、たまりかねて「お金を入れる時には預け入れのキーを押すのよ」「えっ。俺、振込みを押した」「だから詐欺に注意と言う画面が出たのよ」「千円札ばかりになったのは確認のキーを押さずに、両替のキーを押したからよ」と新入生へのATM講座。

三題目。毎月分野を変えて行なっている「女性の懇談会」の5月は、「今年入学した女子学生と」と担当の方をお願いをしていた。学生センターの方の協力もあり、5

人の女子学生が集まってくれた。理事室でコーヒーを飲みながら、早速、ATM をこれまで使ったことがあるかと聞くと二人が「なかった。少し怖かった」とのこと。また、初めて離れた親御さんとの関係を聞くと、「母親から、朝晩電話がかかっていたのがようやく1週間に1回になった」「未だに場所を変わるとに電話をすることを要求されている」「よく電話がかかってくる。最近少しわずらわしくなってきた」と言う。

最近、私の末娘が結婚をした。それまで電話は必要な時だけだったのが、「疲れてないか。仲良くやっているか」などと電話をかけることが多くなったのでお母さん達の気持ちも良くわかる。しかし、昔を思い返すと、親離れを始めた彼女達の気持ちも分かる。その証拠に終わり頃に入っていたいただいた学長が「大学は楽しいか」の質問に「楽しいです！！佐賀大学に来て良かった」とひときわ大きな声で答えていた。正直な感想の様子。

5人のうちの3人は理工学部。文科教育学部の学生も理科教師を目指していると言う。「理系に進学する女子がなぜ少ないのか」を尋ねると「一年生の秋にはもう理系文系の進路を決めなければならない。物理、数学がネックになる。上の学年を見ても女子は少ない。彼女ならその教科が得意だから当たり前だなと思う人しかいない。多数いればいろいろな人を見て頑張ってみようという気持ちになるのだが、大変なのかなという気持ちが先立つのでは」という答え。国は女性の研究者を増やす施策を講じているが、裾野の高校生達がこう思っているし、1年生で決めろは無理。途中で変更がきく社会でなければ萎縮してしまう。2008年版男女共同参画白書では教授職の女性比率は理学3.9%。工学2.1%。これを20%、15%にする目標を掲げている。物

理学者の米沢富美子さんは「どうせ女だからこの程度でいいという気持ちでは前に進めない」「若い人に研究者人生の喜びを伝えたい」と読売新聞に掲載された記事で語っている。米沢さんは最近、若い人へ向けて「まず歩き出そう」を岩波ジュニア新書で、出している。

5人のうち、4人は大学祭の中央実行委員。「実行委員に男子が少ないので力仕事は困るのでは」という彼女達に「男子は技術。女子は家庭科」という時代があったこと。彼女達は男女一緒に学んでいる。力がない人でも道具を使えば力仕事ができることなどの話をすると、昨年使った看板を解体した時、思いのほか楽にできて面白かったと話し出した。従来の思い込みに縛られることなく、一人ひとりの個性を大切にしてい、能力を開いていってもらいたい。



長谷川学長も参加した北島理事と女子学生との懇談会の様子